

認知症は、脳細胞がさまざまな原因で減少したり、働きが悪くなったりして、記憶力や判断力の障害が持続的に起きる状態をいい、誰もがかかる可能性がある病気です。本市の要介護認定による認知症高齢者は、平成29年9月現在で在宅が1222人、施設入所が1204人で合計2426人となっています。認知症になる前までは、社会の一員として活躍し、家庭を支え、子どもを養育してきた人たちです。今号は認知症の人の本質をしっかりと見極めて支援するために、介護・医療・福祉に取り組む人たちを紹介します。

認知症

になっても安心して暮らせるまちへ



嫁の証言 姑のAさん

ものがなくなつた 貯金通帳がなくなつた から始まりました

認知症の姑の介護をし、苦労されたお嫁さんから体験談を伺いました。

姑は、70歳で認知症を発症しました。ある日「物がなくなつた」から始まり、「貯金通帳がなくなつた」「とられた」「下着がなくなつた」と人を疑うようになりました。

夫は姑の言葉を真に受け、警察へ相談に行きましたが、その後、家の中で探しましたが、見つかりました。このほか、必要以上にたくさん買い物をするようになりました。買う物は靴下、シャツ、ズボンなどの比較的安い物に加えて、時には呉服店で着物や反物など高価な品を買ってきました。呉服店からは買物のため送迎までしてもらっていたのですが、後で気づいたのですが何家には必要のないさらしがある

十反もありました。

姑は持病もなく、病氣と言えど血圧が高いくらいで、薬も飲んでいませんでしたが、その頃には、病院で認知症だと診断されました。

認知症を発症して5、6年経つと「今日は結婚式とか法事はないの？」と、毎日のように聞くようになりました。結婚式や葬式、法事があれば勝手に出かけてしまうので、「今日は何もないよ」と繰り返してしまいましたが、姑は納得しません。「今日は何もない」と紙に書いて渡しても、クシャクシャにしてポケットに突っ込むだけです。ですから、分かりやすいように、段ボール紙に大きくメモを書いて渡すことにしました。通夜や結婚式のし袋もたくさん買ってしまうので、今でも家に残っています。

そのほか、味噌汁の味を整えるしよゆを1本全部入れて作ったり、米を見ればとぐ必要がなくても、すぐといでしまいました。といた米は、釜を入れないで炊くものから、煙が充満し炊飯器を2回も壊してしまいました。そのため、米は常に目の届かない風呂場に置きました。姑は家に遊びに来た実の娘や近所の人に「嫁はご飯を食べさせたくない」と言うため、周りの人からは「ご飯をちゃんど食べさせて」と言われ、とてもショックを受けました。

「デイサービスに行くようになってひと安心」

そのうち、姑がデイサービスを利用するようになりました。週1回からその後は週3回になりました。姑がデイ



市民が学ぶ徘徊対応模擬訓練

サービスに行っている間は安心でき、自分へのごほうびとして、コーヒーを飲み、解放感に浸ることができました。それまではコーヒー1杯さえも飲む暇がなかったのです。姑は、貯金通帳を家に置くと誰かに盗まれると思ったのか、デイサービスに行くときは必ず腹巻に入れて持っていました。また、印鑑も取られてはいけなさと考えたのか、口の中に入れモグモグとさせていたときもありました。

「それでも心配で頻繁に会いに行きました」

施設に入所させても心配で、1日おきに面会に行きました。今まで何十年も姑と生活してきたので、別れて暮らすのがさみしかったです。姑の顔を見ると安心して、認知症の姑がかわいくさえ感じました。姑は90歳で他界しました。当時は振り返ると、認知症の対応や介護の仕方が、日増しにうまくなっていったと思います。ですから、今、介護をしている人には、先々まであまり心配しないようにと、アドバイスしています。